

「森の恵み」を考える——人と自然の平和的共存に向けて」 中間報告

青柳寛・戸谷浩・野口久美子・勝俣誠
猪瀬浩平（コーディネーター）

世界各地で、深刻な森林破壊が進んでいる。このような状況のなかで、本研究は、歴史学や文化人類学、政治経済学の立場から、人と森、林との関係を歴史的、文化的に検討し、人と森林、人と植物の持続的で、調和的關係を生み出すための「森林の思想」を探ることを目的とする。気候変動や産業化によって森林をめぐる状況が劇的に変化するなかで、人びとの遊びを含めた暮らしや、自治がいかに成立しているのかを視野に入れる。

6月8日に白金校舎で千葉大学名誉教授の藤井英二郎氏をゲストに、都市における街路樹の役割と、国内外の樹木保全をめぐる状況をテーマに研究会を開催した。研究会前には、ボランティア・市民活動論1Aの履修者と研究会メンバーが合同で、神田警察通りの街路樹を守る会への訪問と聞き取り調査、および再開発による樹木伐採問題が起こる神宮外苑の樹木伐採問題のフィールドワークを実施するとともに、研究会内では白金校舎正門前の大銀杏の実地調査とともに、キャンパス内の樹木の管理状況についてのフィールドワークを行った。藤井氏よりは、欧米において都市の樹木の価値の再評価がなされ、それを可視化するためのシステムが導入されていることの報告や、樹木伐採をする際の最新の調査方法についての講義をいただくとともに、明治学院内の樹木が過剰剪定されていることについて、一本一本の木を確かめながら説明いただいた。この研究会により、昨年の行われた大銀杏の伐採や、今後検討される可能性のある伐根（伐採された後もヒコバエが生えている）の是非のみならず、明治学院が樹木と共生できているのかについて議論を深めることができ、横浜校舎も含めたキャンパスの樹木被覆率の向上等の問題意識を高めることができた。

8月19日～24日に高知県四万十町で調査を行った。現地で森林保全活動に取り組むNPO法人朝霧森林倶楽部の活動の参与観察を行うとともに、前年行った聞き取り調査のインフォーマントの作業小屋の見学をするとともに、森林管理の方法についての聞き取りを行った。こちらについて、調査についての勝俣氏の報告書の一部を以下に添付する。

この3日間振り返って考えるに3つの問を立ててみた。

1. かつて「会社」と「社会」は同じだった。

2024年8月20日：株式会社「土佐龍」訪問

ヒノキを加工してまな板などを製造する会社「土佐龍」訪問では会社とは何かを改めて考える機会となった。世代もジェンエンダーもおそらくバックグラウンドも異なる数十人ぐらいのスタッフ・従業員を企業内（社会分業でない）各分業部署内の人々の働き方に関心を持った。完成品チェックをしている近隣在住のパートの方は私のおしゃべりに応じてくれて、楽しそうだった。会社とは英語でソサエティ、フランス語でソシエテである。19世紀後半、西洋に開国した江戸日本は前代未聞のこの語の訳に困ったようである。なぜなら会社はまた私たちが「格差社会」とか「地域社会」といった表現するように企業活動という一つの個体経済活動単位を超えて概念でもあったからである。江戸時代には株仲間というように金もうけのための商業ギルドを意味する用語しかなかった。仲間以外の世界は幕藩体制下では「世間」と呼ばれた。こうしてみるとこの会社のスタッフのかたがたは製造ないし加工業であるが、仲間的会社の感を持っているように見えた。しかも仲間内の利害の共有を超えて、地球環境にも責任を持とうというとても大きな夢も目指している。今流に言えば「環境にやさしい」と公言しながらも、結局はしっかりと儲けの最大化を実現しようとする（グリーンウォッシュないしSDGsウォッシュ型）大企業の対極をなす顔の見える範囲内の「社会的企業」に近いと感じた。ちなみ、会社は大きくしないで地域の中で地域のニーズ（雇用も含めて）に答えて助け合って持続経営していける事例としてアルベルト・イアネスさんの「イタリアの協同組合」を勧めたい。カトリック教会とイタリアの協同組合ーアルベルト・イアネス『イタリアの協同組合』を手掛かりにー | NDLサーチ | 国立国会図書館 <https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000025-I011990006410041>を明治学院大の紀要に私が紹介しているので参考書としてどうぞ。

この意味から、「会社」土佐竜はかつて文学賞をもらって世間で注目を浴びた村田紗耶香さんがいみじくも描写した「コンビニ人間」からなる無機質な大手コンビニ会社の対極をなすのだろう。これからの新しい働き方を示唆してくれた訪問だった。

2. 「木材」になる前に木は生きていた。「人材」になる前に人であること。

2024年8月22日：しまんと製材工場見学。

四万十川でヒノキの森などやたらと生きた樹木を見たり、そのぬくもりを触ったりしてきたせいか、このオートマ化が進んだ工場操業風景は印象的だった。生木があつという間に横に寝かされ、皮が向かれ、角を取った規格木材にカットされ、やがて待ち受けるトラックで材木いちばに運ばれていく。ヒノキの一生である。ヒトの一生と重なってしまった。生まれて、学校に通い、スキルを身に着け、やがて社会と会社からなる就職市場内で取引される「人材」になっていく。このヒトの一生は現代都会世界ではごく当たり前の風景だ。しかし。。。。「しかし」が私にとって残る。これだけで自己完結していいのか？ヒノキがもし人間のコトバを持ったら、おそらくこう答えるであろう。「ボクはただ材木になるために生まれてきたのではない」「生きたいから生きるんだ。刈られても根から生まれるひこばえをみしてくれ」

私たちは人材になるために生まれてきたのか。皆で考えたい、すぐには答えの出ない問いをこの工場見学で感じた。

3. 戦争を2字で語れるか。

8月20日火曜日午後

岡本さんの戦争体験談。彼の体験談を聴くのは今年で2回目である。90 過ぎても山仕事をなさるほどの体力に驚くと同時に、敗戦に伴う満蒙開拓団の崩壊後、小学生独り身で陸路と海路で四万十の故郷にたどり着くお話しの記憶力にも感銘を受けた。何回聴いても無数の人々に助けられて生き延びた岡本さんに敬意を称したくなる。そしてこの戦争とは自衛のための東亜大東戦争と呼ぼうが、米国が太平洋戦争と呼ぼうが、現在の学校教科書でアジア・太平洋戦争と呼ぼうが、この戦争で犠牲になった軍人 230 万人と民間人 80 万人と生きのこった 7000 万人以上の日本人その家族の歴史からなっている。戦史研究者や防衛を語る政治家などにとっては敗戦後の大陸で行き倒れになった叔父と父 2 名は「民間人 80 万死者」の数にうずもれ、岡本さんは生き残れた「7000 万」のなかの一人にすぎない。しかし、岡本さんの家族の歴史からすれば限りなく悲しい、取りかえしのつかない不幸な数年時代であった。

敗戦の翌年、1945 年の真夏に東京の新宿で生まれ、米軍の空襲による焼け跡無人民家がかくれんぼをした私とて、身内の歴史はこの戦争と身内の死者で翻弄されてきた。母方のいとこの父は太平洋戦争末期に徴兵され、日本から 4500 キロ離れた無人島の守備隊に配属され、食料供給がなくなり餓死した。彼の残した餓死寸前までの日記をたどったこのドキュメンタリー映画は、戦後時代さえ知らない 30 代の大川史織さんの監督によって『タリナイ』として公開された。また彼女の映画関連書籍『マーシャル、父の戦場—ある日本兵の日記をめぐる歴史実践』はメイガクの図書館にあるはずである。数年前、お盆のころ、いとこの家に伺い、お墓にお線香をあげにいたが、骨壺は空っぽとのことだった。餓死した孤島の遺骨発掘許可がいまだ下りないとのことだ。遺族年金給付を担当する厚生労働省の戦死原因は「空爆」とされ、「餓死」とは記載されていない。また私のあったことのない 2 番目の兄は、戦争末期、栄養失調の中での薬不足で今なら簡単に治癒できる赤痢で亡くなっている。この家庭内に不幸に関して、2007 年、時の厚労大臣が「女性は産む機会」と発言したと Agence France Presse <https://www.afpbb.com/articles/-/2174092> は報道しているが、戦前ではごく当然として受け入れられ、恐らく勝俣家に「嫁いだ」私の母は息子を救えなかったゆえに「イエ」システム内の有形無形のバッシングに会ったことは想像に難くない。

さらには、義理の父と母についても短く触れておきたい。今は亡き連れ合いの義理の父は皮膚科の軍医で、1945 年 8 月 6 日の広島原子爆弾投下の 2 日後に陸軍調査団（その前後数日の日記は、弓野正武 著、「南湖流滴」、2016 年、で読める。明学図書館も所蔵、また被爆兵士の手書きカルテは広島市に寄贈され、広島市公文書館デジタルアーカイブ・システム、弓野勲少佐、資料番号: 13001131 で閲覧可能）として市内に入ったので、被爆した可能性

が高い。彼自身、戦後、被爆で長生きはできないだろうと身内に漏らしていたようで、毎年8月にはヒロシマ・ナガサキ報道が多くあるので自宅でのTV前を当時の悪夢を避けるように避けていた。義理の母は、戦前は陸軍、戦後は自衛隊出身の多い軍人一家だった。何人も戦死者を数えた家系だったようである。義母の父は陸軍大学校をトップで卒業した柳川兵助で1945年1月に病死したのでA級戦犯にされなかった。

こうした身内の戦死や戦中死というヒトごとでない昭和体験から、私は安易に戦争という2字を使いたくない。

もし仮に日本の人々が深くコミットした15年戦争に関して、この2字を使わざるを得ないとしたら、私は大学生には、たとえばノンフィクション作家の保阪正康さんの「大東亜戦争・太平洋戦争はいかに語られてきたか」という短い講演録を読んで見て欲しい。

<https://www.nids.mod.go.jp/publication/senshi/pdf/199903/04.pdf>

1995年防衛大学校での講演である。私は彼の主張にはすべて賛成できないが、戦争という決定と実行に伴う重たい行為（ヒトのいのちを合法的に奪う）のトップの責任を保阪さんははっきりと問うている。全くである。

彼はこの8月には昭和の戦争について『新しい戦前』にしないために「戦後80年を前に学ぶべき教訓は」という問いを立て、さらに明快に説明している。<https://www.tokyo-np.co.jp/article/347302>

最後に、1990年代の「昔話」だが、私の出張中に明学国際学部のオープンキャンパスで各ゼミのスタンドで私のゼミを担当するゼミ長がある女子高校生から「大学って、なにするトコですか」と聞かれた。彼女は「考えるところですよ」と答えたとのことである。

私はこのやり取りをあとでうれしく聞いた。

二十歳前後であること、これは答えのすぐ出ない、とてつもなく大きな問いを立て、それとあえて苦闘する人生で最も不可解な時を受け入れることだ。

「ボクは、はたちだった。それが人生でいちばん美しい歳だなどとだれにも言わせまい」
ポール・ニザン

“J'avais vingt ans. Je ne laisserai personne dire que c'est le plus bel âge de la vie”

Paul Nizan

以上がこの真夏の四万十川実習についての、3つのすぐには解が見えない問いを立てた感想である